

くろしおの思い出

船長 比 嘉 幸 一

くろしお、就航後、半年位した頃のことですが、当時海洋観測の定線は神山島南をST.1として慶良間の北から久米島の東までで折り返して渡名喜島、粟国島の南より名護湾まででした。命を受けて那覇港を出港し、順番に観測をしていましたが、昼頃より南東の風が次第に強くなり波も高く、午後7時頃瀬底島の東側錨地に投錨しましたが、錨が曳かれて停泊出来ず、名護湾近くの島影で三錨投錨しました。しかし、風がさらに強くなり、波も高くなって停泊中の本船の船首より大波をかぶり、錨曳又は索切れしたら大変と思い、主機エンジンを始動させ、船を風上に向けて走らせるようにして、この荒天をしのぎました。

昭和43年頃だったでしょうか、慶良間での鰹のエサの活魚試験の調査を終って那覇港向け帰港中、渡嘉敷島から前島間で横波を受け、傾斜がひどくもう少しで大惨事になるところをあやうくのがれました。当時はくろしお、乗船まもなくの頃で、船の復原力が私にとって未知だったと思います。その日は北の風12m位と思っています。くろしお、の就航当時より現在に至るまでには色々の調査試験がございましたが、特に人命、財産にかかわる此の2件はいつまでもくろしお、乗船中のおもいでとして私の心に残ることでございましょう。

元機関長 金 城 万 栄

建造まもないくろしお、でカツオ餌料調査のため阿護ノ裏入口に停泊した。春の暖い夜のことだった。夕方より集魚灯の点灯を始めたが、なかなか小魚が集って来ない。夜中近くになって少々集って来たが、午前2時頃海中深い所です早く動きまわっている大きな魚がいたので、小魚をタモで取って、弱らせて動きをにぶくし、放してやると下で動きまわっていた大きい魚が浮上して来たので、それがカツオであることがわかり「それ、カツオが餌についた！」と言って、カツオ釣を準備して釣り始めた。おもしろい程つれたが、たたき起こされた皆さんは、竿を海に入れるやいなや、カツオに引かれるやら、釣り揚げ、はずすやらでてんやわんやのおうそうであった。釣り揚げたカツオは80尾、1尾3kg程であった。結局その日はカツオシオの餌はとうとう朝まで集ってこなかった。